

## 「諸資本の競争」と恐慌との関連について

種 瀨 茂

(21) 「諸資本の競争」と恐慌との関連について

マルクス (Karl Marx, 1818—1883.) による恐慌の把握は、周知のように、つぎのような言葉に、すなわち、「世界市場恐慌はブルジョア経済のあらゆる矛盾の現実的綜合および強力的調整として把握されねばならない<sup>(1)</sup>」という點に端的にせめられている。そこで恐慌において綜合される諸矛盾をブルジョア経済の中に體系的に展開して把握せねばならぬし、とくに「恐慌の可能性の現實性への轉化」を追求することが重要となる<sup>(2)</sup>。私は拙稿「市場價格の周期的變動と恐慌」(『經濟研究』第七卷第三號、一九五六年七月)において、周期的恐慌と循環の經過を示さ

れる諸矛盾と恐慌の具體的な契機を明らかにした。そこでの諸概念が、マルクスの示す「經濟學批判」の體系とどのような関連と意義をもつか、を明かにするのが、本稿の課題である<sup>(3)</sup>。

(1) Karl Marx: Theorien über den Mehrwert, hrsg. von Karl Kautzky. Bd. II. 2. [Friedenau, 1905.] 5. Auflage. Stuttgart, 1923. S. 282. 長洲譯「國民文庫版」二五九ページ。

(2) K. Marx: ibid. 同右。

(3) 右拙稿に對して教示を賜った一橋大學大野精三郎助教授、大阪市立大學末永隆甫教授に感謝する。

前掲拙稿において解明した「不均衡化の過程」「均衡化の過程」は、競争場裡における諸資本の運動の状態を社

會的に綜括し、そこにおける社會的需給間の矛盾を明らかにしようとするものであった。それはマルクスの「經濟學批判」のプラン中「諸資本の競争」(Die Konkurrenz der Kapitalien)として指示されている内容の一部を恐慌論との関連のもとに説明する意圖をもっている。<sup>(4)</sup>

(4) マルクスの「經濟學批判」體系のプランとその問題については、拙稿「カール・マルクス」(『一橋論叢』第三九卷第四號、一九五八年四月號)二七ページ以下、参照。

この「諸資本の競争」の項目は、はじめ「資本」部門の「資本一般」の次に豫定され、「信用」「株式會社」とともに、資本のより一そう具體的運動を分析する豫定であった。マルクスは『經濟學批判』(一八五九年)(Zur Kritik der Politischen Ökonomie. Erster Heft. Berlin, 1859)發表ののち、新たな經濟學研究にそくして、當初のプランの内容を擴充し、従來「資本一般」外に屬していた部分をもとり入れて、現在の『資本論』(Das Kapital. 3 Bde.)全三巻の内容としたのである。すなわち、一八五八―六二年に考えられていたプランの中で「諸資本の競争」の内容として豫定せられていたもののうち、とくに一般的利潤率を成立せしめ、生産價格を成

立せしめる競争の作用が、リカード(D. Ricardo, 1772—1823)地代論批判を契機として、より一そう説明されてきたのである。そして、一八六二年二月または六三年一月に書かれたとされる「第三篇資本と利潤」のプランにおいて、競争の問題が登場し、さらに一八六五年末完成をみた現行『資本論』第三巻の原稿として展開してくるのである。

(5) Karl Marx: Theorien über den Mehrwert. (Vierter Band des „Kapitals“). 1. Teil. Berlin, 1956. SS. 377—379.

當初「資本一般」において考慮せられていた「利潤と利子」には、その成立の經過を説明すべき市場價值・市場價格分析をふくんでおらず、この點が、あきらかに一八六二―三年のノート、いわゆる『剩餘價值學說史』中、リカード研究に當って、説明され、その内容の擴充が、『資本論』第三巻第一〇章となって結實しているのである。そしてそれと同時に一般的利潤率の形成(競争)が明白に加えられる。はじめ構成していた「資本一般」の内容は擴充され、「競争」も「必要なる程度」でその中で論ぜられているのである。<sup>(6)</sup>

(23) 「諸資本の競争」と恐慌との関連について

(6) 佐藤金三郎『經濟學批判』體系と『資本論』(『經濟學雜誌』第三一卷第五・六號一九五四年一月) 四一—四五ページ。高木幸二郎『恐慌論體系序説』一九五六年、五八ページ、参照。

恐慌の可能性が現實性に轉化してゆく諸契機は、この「經濟學批判」體系のそれぞれの段階に當って説明せられるべきものであるが、「諸資本の競争」の段階において第三卷の段階においてどのようなようにはたされているのであろうか。マルクスが研究の経過においてそのプランの「資本一般」を内容的に擴充し、「競争」の問題をも、その中に投入してきたとすると、右の點はとくに注目すべき論點となるのである。そこで次に恐慌の可能性にかんし、とくに『剩餘價值學說史』での分析について、學んでゆこう。

二

周知のように、恐慌のもっとも抽象的な可能性は、商品生産の矛盾の發現の中に存在する。商品の内的矛盾——使用價值と價值——は、價值形態の展開を通じ流通過

程において商品と貨幣とに分裂し自立化してくる。この二要素の関連である販賣と購買の二過程は内的統一にありながら相互に分裂し獨立化している。この商品の姿態變轉が、恐慌の「一般的・抽象的可能性」であり、それは「もっとも抽象的形態」における恐慌である<sup>(1)</sup>。

(1) K. Marx: 'Theorien, Bd. II, 2. SS. 279—282, 285. 長洲譯、二五六—二五九ページ、二六三ページ。

この商品の姿態變換にふくまれる「恐慌の可能性」は、「内容のない・十分な内容をもった動機のない」形態にすぎない。「販賣と購買は分離しうる。」だが「しかし、それらは相互に圓滑に移行しあうこともできるのである。」<sup>(2)</sup>この抽象的可能性は、資本の再生産過程において、單純にくりかえされる。資本の生産過程と流通過程のからみあいの中で、資本は商品でもあるかぎり、資本の姿態變換の中には、「一般的・抽象的可能性」がふくまれる<sup>(3)</sup>。

(2) K. Marx: op. cit., S. 282. 長洲譯、二五九ページ。

(3) K. Marx: ibid., S. 283. 長洲譯、二六〇ページ。

しかし資本の再生産過程における、直接的生産過程と流通過程との分離によって、恐慌の可能性は、いっそう

發展する。「ここではじめて一つの内容を、すなわちこれらの形態が自己を顯現しようとする一つの基礎を獲得する<sup>(4)</sup>」ここに與えられる内容とは、資本にふくまれる矛盾である。資本の直接的生産過程には、資本主義生産方法の基本的矛盾——生産の社會的性格と所有の資本主義性格の矛盾——がふくまれる。資本の蓄積過程のなかで、この基本的矛盾は、内在的矛盾——無制限な生産の擴張と大衆の貧困化の矛盾——となつてあらわれる<sup>(5)</sup>。この直接的生産過程における矛盾が、恐慌の原因であり、恐慌の可能性を現實性に轉化させる基礎である<sup>(6)</sup>。

(4) K. Marx; op. cit. 譯二六〇ページ。

(5) Lenin; Zur Charakteristik des ökonomischen Romanismus. 1897. im „Anhang zu Karl Marx. Das Kapital. Bd. II. Berlin, Dietz, 1953.“ S. 552. 邦譯『レーニン全集』大月書店刊、第二卷、一五〇—一五一ページ。

(6) K. Marx; ibid. SS. 283-284. 長洲譯、二六〇—二六一ページ。S. 289. 邦譯二六七—二六八ページ。S. 310. 邦譯二九三—二九四ページ。

この根拠を與える資本のたんなる直接的生産過程は、「それ自體としては、なにも新しいものをにつけかわえることはできない。」恐慌の問題は、生産過程と流通過程

との統一と分裂の中にあるからである。この兩過程のからみあいの中で、あらわれる矛盾の内容は何であらうか。ここでは資本としての資本に固有な資本の形態規定から生れる恐慌の可能性が明らかになる<sup>(7)</sup>。

(7) K. Marx; op. cit., S. 286. 長洲譯二六四—二六五ページ。

この恐慌を生み出す條件、この「過剰生産の特有の條件は、資本の一般的生産法則である。すなわち、生産諸力に應じて生産すること、いかえれば、現存する市場の限界や支拂能力ある需要の限界をかえりみずに、あたえられた量の資本で最大限量の労働を搾取し、しかもこのことを、再生産と蓄積のたえない擴張によって、したがって収入の資本へのたえない再轉化によって遂行する可能性に應じて、生産すること、しかるに他方では生産者大衆はいつまでも欲望の平均的程度に制限されており、資本主義的生産の基礎にしたがつて制限されていざるをえないことである。」この生産の無制限の發展を目指す資本主義生産方法そのものが生みだす大衆の貧困という條件のもとで、生産過程は流通過程との對立をひろげるのである<sup>(8)</sup>。かくして資本は生産を促進するととも

に實現困難にもとづく生産の停止・恐慌を生ぜしめる。資本による生産の限界は資本そのものなのである。<sup>(9)</sup>

(8) K. Marx: op. cit., S. 318. 邦譯三〇二ページ。

(6) K. Marx: op. cit., S. 305. 邦譯二八五―六ページ。

(10) K. Marx: op. cit., S. 299. 邦譯二七九ページ。S.

301. 邦譯二八一ページ。

だが資本の生産過程と流通過程との分裂と自立化は、「一そう發展した可能性」の恐慌をふくむとはいえ、その分裂は統一された過程として進行しうるし、進行しつつある。右のような恐慌の契機が、いかに具體化された矛盾を發現せしむるか。その展開こそ「現實の恐慌」に迫る追求を要する問題なのである。マルクスはこの課題を「資本主義生産の現實の運動、競争と信用によつてはじめて説明しうる」ものとするのである。

(11) K. Marx: op. cit., S. 286. 邦譯二六四ページ。

以上は『剩餘價值學說史』として發表された一八六二―三年のノート中、第一三冊にふくまれている。前述のように、マルクスは、その後、競争・信用に関する研究をすすめて、『資本論』第三巻に入れるにいたった、そこで、その中で「諸資本の競争」は右の過程をどのよう

に示しているであろうか。

(12) К. Маркс: ТЕОРИИ ПРИВАТОЧНОЙ СТОИМОСТИ (IV ТОМ «КАПИТАЛА») Часть II. Москва, 1957. Стр. 497.

### 三

社會的總資本の再生産、すなわち生産過程と流通過程のからみあいには『資本論』第二卷第三篇において「表式」によつて分析せられ、それはレーニンの「市場の理論」に關する論稿中で發展された。そこでは社會的總資本の素材的・價值的補てんがいかに行われるかが分析の對象となつている。それは「不均等的發展」の姿をとつて内在的矛盾を現象せしめているのではあるが、直接、市場における實現の困難さを發現してはいない。

そこで、この「表式」に關して「過少消費」を導入し、とくに部門比例性の缺如のゆえに恐慌が生ずるといふ解釋が生じうる。それは同時に部分恐慌論であつて、個人的消費對象から恐慌の勃發を示そうとする。表式が部門間不比例の關係を示しうるとしても、さらに問題なのは、何故にその部門での過剰生産が生ずるかを示さねば

ならないであろう。<sup>(11)</sup>

(11) K. Marx, op. cit., SS. 304, 312. 邦譯二八一・二九四ページ。

それこそ資本制生産の内的矛盾なのである。資本蓄積の進行は、むしろ生産的消費を増大せしめ、生産を無制限におしすすめようとする。現實にその過程は、ある一定時期は進行し、ある点において、個人的消費の限界によって規制される、という関連を示さねばならないであろう。「表式」による分析は、いわば資本制生産の構造的分析を示しているのであって、周期的に示される右のような過程を直接示すものではない。

この無制限な生産の發展と大衆の過少消費が示す矛盾がどのようにあらわれるかは、資本の現實的運動において解明されうる。

#### 四

資本の現實的運動は「諸資本の競争」の關係である。そこでは競争する多數の資本が相互に對立しあう。販賣と購買・資本の生産過程と流通過程は、社會的供給と社會的需要という二要因として分裂し對立しあっている。

資本はより多くの利潤を目指して自由に移動することによって、供給と需要の均衡を成立せしめる。右の分裂(たえざる不均衡)は競争の過程で統一(均衡)化される。それは個別價值から社會的價值(市場價值)を成立させ、一般的利潤率を成立させる。

この分析が『資本論』第三卷第二篇の課題である。マルクスはそこで、基本的には「資本一般」の範圍内で、資本制生産様式の内的構造とその具體的形態を「觀念的平均において」明らかにしている。その意味から言えば、諸資本間の競争はいわば、この平均を生み出す均衡化の作用面において把えられているものと見なければならぬであろう。

それゆえ「表式」分析に示された「不均等的發展」の競争過程における發現たる「一般的利潤率の傾向的低下」の過程も、不均衡な經過をつらぬいて貫徹する長期的傾向として、いわば觀念的平均の長期的經過を示していると言ふことができる。

この長期的傾向そのものから、直接、資本による生産の制限を示すことはできない。その矛盾はより展開されて示すべきなのである。

『資本論』第三卷第三篇第一五章がこの説明にふれているのである。競争の経過は、分裂（不均衡）が統一（均衡）される過程とともに、つねに暴力的に均衡化されるべき過程をも内包している。「均衡化という均衡化はすべて偶然的なものであり、諸特殊部門での資本の使用の比例はたしかに一つのたえざる過程によって均衡化されるが、しかしこの過程がたえまないものであること自體が同じようにたえざる不比例を前提するのであって、この過程はこの不比例をたえず、しばしば暴力的に、均衡化しなければならないのである。」<sup>(1)</sup>それゆえ分裂が統一化される経過は、暴力的統一化をも内包している。なにゆえに、競争の過程の中で解決せられない不均衡が発生するのか、いかにしてそれは展開しうるか。現実の恐慌たる過剰生産の暴力的解決をあきらかにしうるためには、いかにして過剰生産は発生するか、生産と消費の不均衡はいかにして生じ、それが解決されるか、を説明しなければならない。

(1) K. Marx; Theorien, Bd. II, 2. SS. 263, 274, 287. 邦譯、二三七・二四九・二六五ページ。

マルクスが『資本論』第三卷第三篇第一五章において、

はじめて、實現條件の困難さをとりあげ、そこで資本の生産への制限にふれて内的矛盾の展開を説明したのは、競争過程内での分析をただ潜在的にふくんでのことなのである。しかも、第三卷のこの第一五章に展開される説明が、その大體の内容と本旨において、すでにわれわれが學んだ、『剩餘價值學說史』第二卷の分析をうけつぎ、整序し分析を深めたものであることは明らかである。

しかし、それは内的矛盾の展開にふれているとはいえ、資本による無制限の生産の擴張がどのようにして過剰を生産しうるかは示されていない。それは「内的構造」の平均的様相を分析している『第三卷』では、直接の對象とはなりえないのである。

以上のように見ると、「諸資本の競争」として考慮せられたものうち、均衡化への作用をもつ局面は分析の對象とせられているが、不均衡が発生し進行されてゆく経過はのこされたものとみることができるといえる。それゆえ内的矛盾の展開にふれるとしても、社會的需給の不均衡が蓄積とともに発生し、そして恐慌によって暴力的均衡化をみるという経過は、直接示されてはいない。しかも、この経過が景氣循環と周期的恐慌のプロセスに外ならない

のである。

マルクスはプランの内容的擴充とともに、當初豫定していた「資本一般」の内部に、「競争・信用・土地所有・勞賃」の分析を加えて、『資本論』の構成をつくりあげた。恐慌論に關連していえば、資本の一般的法則から規定せられる恐慌の條件は、そこで示されている。それは、當初豫定の「資本と利潤」での補足をもふくめて、「一そう發展せる恐慌の可能性」として示され、現實性への轉化の根據は與えられている。

さらに、「諸資本の競争」中の均衡成立分析が導入されてきている。ところで、これは前述のように、「資本と利潤」をあきらかにするための分析であった。この均衡を成立せしむる競争は恐慌論に關しては、新しい要素を加えていない。以上の分析では全社會的にみればなお、價值と價格の一致を前提するものであって、いかにその乖離が生じるかは示されていないのである。その點でなお「資本一般」の前提と同じ地點に立っているものと言わねばならない。

かくして、「現實の恐慌」そのものは、分析の外にあるとみることができるといふ。しかれば、それはいかにして解明

さるべきか。資本間の競争の經過を直接對象とする分析を、「競争論」としてなお求めるべきではなからうか。少くとも、「不均衡」をなにゆえ生み出すかの分析を求めることができるのではなからうか。

## 五

なにゆえに資本は生産過程の迫進を一定の限度まで、消費を顧慮せずにおしすすめることができるのか。しかも過剰生産をつづけてゆき、すでに需給間の不均衡が發生しており、ある一時點ではじめて不均衡が爆發し、解決されるのか。

それを可能ならしめるものは、諸資本の競争なのである。

「均衡的な生産、これはただ、ただし均衡をたもつように配分されようとする資本の傾向があるときだけのことである。そして——資本は剩餘勞働や過剰生産性や過剰消費等々をえようとして、かぎりなく努力しているのであるから——均衡を破壊しようとすることも、まったく同様に資本の必然的傾向なのである。競争においてこの資本の内的傾向は、他の資本によって課されるとこ

(29) 「諸資本の競争」と恐慌との関連について

ろの、そしてただしい均衡をこえてたえず、まえへ、まえへ！とかりたてるところの、ひとつの強制としてあらわれ<sup>(1)</sup>る。」この諸資本の対立と競争は、一面ではもっとも高い利潤率を生み出す部門への資本の自由な移動を行わしめる。と同時にこの部門への資本の移動は、つねに相互に排除しあう対立であるから、より安く生産し販賣しなければならぬ。前者の運動は市場生産価格を成立せしめ、後者の運動は、特別剰餘價值(超過利潤)を目標としての資本の蓄積過程に外ならない。この両面の運動によって、資本は社會的供給の社會的需要への適應を可能にしうるのであり、市場價格の騰落を通じて、それを價值に一致させうる。これが一面である。他面そのような平均化・均衡化の運動それ自體が、つねに資本を生産へ生産へとかり立てるのである。生産力を停滞したままの資本は競争場裡から驅逐せられざるをえない。それは自らの生産物に對する需要を顧慮せず、競争において脱落されないようにのみ、生産をおしすすめる。

だから、「資本は、均衡的な生産の場棄であり、また同様にその不斷の定立である。存在している均衡は、たえず、剰餘價值の創造と生産力の増大とによって場棄され

なければならぬ」のである<sup>(2)</sup>。

(1) K. Marx; Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie. Berlin, 1953. SS. 316—317. 邦譯『ブルジョア・ヘンゲルス選集』第九卷、三四〇ページ。  
(2) K. Marx; *ibid.* S. 317. 邦譯三四一ページ。

極端な場合には、資本はそれゆえ、たとえ現狀ならびに將來への豫測において生産が需要を超過し、過剰生産となりうると分つても、より安く生産し販賣し、他の諸資本を壓倒して市場を支配しうる事が可能であれば、生産力を高め、生産を促進してゆくこともありうる。

このようにみると、資本の競争によってすすめられる生産のための生産は、その構造において、つねに過剰生産への傾向をうちにふくむ資本の運動であることがわかる。それは、市場價值が市場生産價格から上方に乖離するといふ姿をとってあらわれる。生産のための生産は社會的需要となつて發現するが、それが供給によってみたされ、市場價格が市場生産價格の水準にまで低下し、均衡化の作用が完全にゆきつく先に、すでに同時に生産は進行し、一そう大きな社會的需要を發現して、市場價格の低下を阻止し、あるいは高める。このような資本の生

産過程は、流通過程における實現をつねに事後的に経過しつつ進む<sup>(3)</sup>。それゆえ、實現の條件がつねに市場價格の騰貴として示される良好な狀況を生み出しているのであるから、生産過程と流通過程の獨立化・生産と消費の分裂は、それぞれ自立化の限界までおしすすめられうるにいたるのである。前掲拙稿において「不均衡化の過程」として分析したものは、この點にあつた。資本はその本質においてこのような構造をもち、それが、好況の段階における経過となつてあらわれるのである。

(3) 前掲、拙稿、二〇四ページ、参照。

## 六

右にみたごとく生産のための生産は本來生産のもつ「弾力性」の制限をこえて發展せしめられる<sup>(1)</sup>。すでに社會的需要(生産的ならびに個人的消費)をこえた過剰生産が行われつつあるのに、蓄積は進まざるをえないのである。

(1) K. Marx, Das Kapital, Bd. III, SS. 335-6. 長谷部譯。

「ある生産は他の生産を運動させ、こうして他の資本

の労働者のうちに消費者を自分のためにつくりだすから、生産そのものによつて定立させられる労働者階級の需要は、個々の各資本にとっては「適切な需要」としてあらわれる。この、生産そのものによつて定立させられる需要は、生産をかりたて、生産が労働者との關連において生産しなければならなかつたであろう均衡を突破させる。しかも資本は、餘剰労働を定立する條件たる必要労働を最低限にきりさげようとする本質をもっている。

「だから資本の價値の實際のない増大——實際のない價値定立——は、ここではまったく、交換領域の制限の定立、つまり價値の可能性の——生産過程で定立された價値の實現の可能性の——制限の定立と同一なのである。」<sup>(2)</sup> こうして生産力の發展はますます、「消費諸關係がよつて立つ狹隘な基礎とますます矛盾するようになる。」<sup>(3)</sup> この實現の條件——敵對的分配諸關係の基礎上での消費力——からの限界は、資本としての生産を不可能ならしめるのである。だから「資本制生産の眞の制限は資本そのものである。」<sup>(4)</sup>

(2) K. Marx; Grundrisse, S. 333 邦譯『選集』第九卷、三四九—三五〇ページ。

(31) 「諸資本の競争」と恐慌との関連について

(3) K. Marx; Das Kapital. Bd. III. SS. 272—273, 278.

長谷部譯。

(4) K. Marx; ibid. S. 278. 邦譯同右。

しからば、この資本の生産過程を限界づけるものを、  
社會的需要のうちの大衆の「過少消費」に歸着せしめ、  
不均衡を單に個人的消費財の過剰生産に歸することがで  
きるであろうか。そうではない。實現の條件は、さらに  
「相異なる生産部門間の均衡」によつても制限せられてい  
るのであり、むしろ、生産財生産こそ好況の主動的役割  
りを果たしてきている。ところでこの生産的消費による  
需要についても、同じ様に、「支拂われる・交換價值を定  
立させる需要としてのこの需要は、生産者がたがいのあ  
いだで交換しあうかぎり、適切かつ十分なものである。  
最終の生産物が、直接的な最終の消費にあつてその限  
界をみいだすやいなや、この需要の非適切性があらわれ  
る。ただし均衡をのりこえさせるこの外觀は、競争の  
ところでくわしく展開するように、たがいに反撥しあう  
もの、たがいにまったく無關係な多くの資本である、こ  
ろの、資本の本質を基礎として(6)いる。」

(5) K. Marx; Das Kapital. Bd. III. S. 272.

(6) K. Marx; Grundrisse. SS. 323—324. 邦譯『選集』第  
九卷、三五〇ページ。

ここにみられる「ただし均衡」の状態は價值ないし  
生産價格の視點に立つての、社會的な生産財消費に對す  
る供給の均衡の關係であつて、その場合の利潤率は個人  
的消費財生産における利潤率と等しい。生産のための生  
産はこの社會的需要をもこえて、過剰生産をひきおこし  
うるし、起しているのである。そして、その生産の發展  
を阻止するのは、資本としての實現が不能におち入るか  
らである。

大衆の過少消費といわれる要因は、一連の關連をもつ  
て、つまり一定の一般的利潤率をもつての資本の生産と  
いう關連をもつて、この生産的消費財の實現を規定して  
いるのである。過剰生産が顯現して一定の利潤率をもつ  
ての實現が不能におち入るならば、この生産財生産にお  
いても、恐慌が突發しうるのである。

このようにしてはじめて、「手段——社會的生産力の  
無條件的發展——が、制限された目的——現存資本の増  
殖——とたえず衝突」(7)し、しかもそれが周期的に突破され  
ることが解明されうるのである。「資本の過剰生産なる

ものは、資本として機能しうる生産手段、すなわちある  
 與えられた搾取度での——けだし、ある與えられた點以  
 下へのこの搾取度の低落は資本制生産過程の攪亂と停  
 滯、恐慌、資本の破壊を生じるから、——労働の搾取に  
 充用されうる生産手段、すなわち労働手段および生活手  
 段の過剰生産以外の何ものも意味しない。資本のかかる  
 過剰生産が、程度の差こそあれ大きな相対的過剰人口を  
 伴うということは、何らの矛盾ではない。」

(7) K. Marx: *Das Kapital*, Bd. III, S. 278. 長谷部譯。  
 (8) K. Marx: *ibid.*, S. 284. 長谷部譯。

このような過剰生産を生み出したものは、前節でみ  
 た「不均衡化の過程」にある資本の運動であった、と云  
 うことができる。

## 七

以上においてわれわれは、恐慌と関連せしめられる  
 「諸資本の競争」が、社會的需給の不均衡を必然的に發  
 生させてくるという點を明らかにしうるし、しかも、そ  
 の不均衡は、たんに生活資料の過剰生産に限定されては  
 ならないこともまた説明しうるのである。すなわち、マ

ルクスがしばしば言及しているように、均衡化の作用と  
 しての資本の現實的運動が、同時に、不均衡を累積的に  
 擴大してゆく運動であり、生産と消費の矛盾を擴大して  
 ゆく過程であることが示されうる。

マルクスが『資本論』第三卷において、「競争の基本  
 法則」<sup>(1)</sup>を展開したとき、あきらかに、この均衡化の作用  
 を對象とし、市場價值および生産價格成立の經過を解明  
 せんとしたのであった。そこですでに現實の資本間にお  
 ける對立が内的本質を外的必然として各資本に及ぼされ  
 る意義を把握したのであるが、そのような資本間の對立  
 が、全社會的に、資本による生産の制限を發現するプロ  
 セスは、なお明らかに残された理論的分野であった。そ  
 の點を解明するためには、第五節でみたような市場價格  
 を指標とする資本の運動を「諸資本の競争」の残された  
 分野としてとりあげねばならないのであろう。

(1) K. Marx: *Das Kapital*, Bd. III, S. 58. 長谷部譯。

(2) K. Marx: *ibid.*, S. 885. 長谷部譯。

このような「不均衡化」の作用は、商人資本の獨立化  
 によって、一そう強化される。即ち、販賣と購買の分離  
 は激化し、資本の姿態轉換は一そう分裂せしめられ、

(33) 「諸資本の競争」と恐慌との関連について

「假空の需要」の創造はその發現として現われる。<sup>(3)</sup> 同時に信用・投機的作用が、この作用を激化せしめる。

(3) K. Marx; op. cit., SS. 335—6.

(4) K. Marx; *ibid.*, SS. 535, 482.

マルクスは當初のプランにおいて、商人資本の「媒介作用」はやはり「諸資本の競争」において考察されるものと豫定しているし、<sup>(5)</sup> 「信用」は「<sup>(6)</sup> までもなく「資本一般」のうちに解明の對象とされるはずであった。<sup>(6)</sup>

(5) K. Marx; *Theorien über den Mehrwert*, Bd. II, Teil 2, S. 253. 邦譯二二六ページ。

(6) *ibid.*, SS. 352—3. 邦譯二二五ページ。

このような分析はあきらかに『資本論』第三卷中に包含されてきた。それゆえ、恐慌論との関連のもとに、右の分析をさらに進めなければならぬ。

しかしながら、商人資本は、流通過程にある資本の姿態變換における機能の獨立化によって生れてくるのであるから、商人資本は、資本の生産過程と流通過程の分裂を激化させる作用をもたらすにしても、なにゆえその分裂が、ますます擴大しなければならぬかの必然性は、商人資本そのものによって與えられているのではない。

いうまでもなく、この分裂をおしすすめる必然性は、前述のように「諸資本の競争」によって與えられているのである。それゆえ、商人資本による過剰生産激化の作用は、なにゆえ資本がそのような不均衡を發生せしめうるか、の分析のうえに立って、はじめて解明されうることと言わねばならない。

(7) K. Marx; *Das Kapital*, Bd. III, SS. 297—8. 長谷部譯。

われわれは、商人資本の運動によって、過剰生産發生の一そう具體的形態に接近しなければならぬし、さらにまた「信用」の分析をも必要としている。とくにこのような具體化の分析は、恐慌勃發の諸要因をあきらかにするうえで重要な役割をもつ。

前節までにみたごとき「不均衡化」の進行が、どこで限界づけられるかその要因として私は前掲拙稿において、資本の絶對的過剰生産をあげ、それが市場價格の運動として發現するものとして把え、「價值的視點から見るよりも〔市場價格視點で見れば〕はるかに膨張された規模において、利潤の増進が市場の利潤率の低下をおきないえない點に到達する、<sup>(8)</sup>」とのべた。右の把握におい

ては、資本の絶對的過剰のみを恐慌突發の契機としてあげたのであるが、マルクスがこのような場合を、「極端な前提」<sup>(9)</sup>として考察の對象としていることをまた注目しなければならぬであろう。

(8) 前掲、拙稿、二〇六ページ。

(9) K. Marx: op. cit., Bd. III, S. 264. 長谷部譯。

それゆえ具體的な過剰生産發生の經過及び恐慌勃發の諸契機については明らかに商人資本並びに信用によるその激化作用を、分析の對象としなければならぬ。

今ここでそのような課題に迫るまえに、以上第四節—第六節における説明によって次の諸點を要約することができる。即ち、『資本論』第三卷第三篇までの分析に含まれる恐慌の説明は、なお基本的内容において「資本一般」の段階における「一そう發展せる恐慌の可能性」の分析に當る、ということ、そしてさらに、それを具體化し、現實化するためには、まず、「諸資本の競争」の分野において、社會的需給の不均衡發生・過剰生産發生の必然性を資本の運動として説明するべきであり、『資本論』第三卷第三篇までに含まれる「競争」を補充し展開する必要のあること、これである。われわれは、そのよ

うな分析のうえにはじめて、一そう具體化された商人資本・信用の恐慌との關連を理論的に説明しよう。

右のようにみた「不均衡化の過程」の分析——および前掲拙稿で説明した「市場價格の周期的變動」分析——を内容とする「諸資本の競争」説明の殘された分野は、『資本論』第三卷第一章での指示を具體化せしめるものであって、その補充として、同章の段階において説明しようともいえよう。しかし『資本論』全三卷が、なおその理論的基本性格において、「資本一般」の性格を保持するものと把え、むしろ右のような「諸資本の競争」分析はなお『資本論』全三卷ののちに殘されており、マルクスの當初のプランにおいて豫定していた段階に、なお置かれてよろしいと言ふことができるのではなからうか。プランの全體系との關連を明らかにするためには、商人資本や信用をふくめて、恐慌と景氣の循環過程の分析をより具體化しなければならないのであるから、右の點に關してはなお次の課題としたいと思う。

(一九五八・八・二五)

(一橋大學助教授)